

# 対話により命喜ぶ場を創造

私たちの暮らしや価値観を大きく変えつつある新型コロナウイルス。コロナの流行が人間社会に突きつけている課題とは何か。コロナ禍の中、私たちは命にどう向き合えばいいのか。医療の枠を超えて伝統芸能や芸術、農業などさまざまな分野から「いのち」と向き合い続ける熊本市出身の医師稲葉俊郎さん(41)＝長野県軽井沢町＝に寄稿してもらった。

## コロナ禍 Y字路に立つ私たちの社会

寄稿 医師 稲葉俊郎 (熊本市出身)

新型コロナウイルスが地球を席巻している。医療現場で働きながら危惧していることは差別や分断の問題だ。新型コロナウイルス感染症が出たことで誹謗中傷や差別が行われる。病気がかかった人に、健康状態を心配し気遣うのが当然ではないだろうか。群衆不安の原因は、全員が当事者側に戻ったことかもしれない。いじめられたくないからいじめの側に回ればよいという不安心理が働くことと同じように、ただ、本来は誰もが同じ立場にいるのだ。

そうした中で希望を感じたことが、鹿児島・奄美諸島の与論島での事例だ。人口約5000人の与論島で島民が次々に感染した。鹿児島島の病院に搬送されていく島民たちに、みんなが「大丈夫か」「元気が」とメールでメッセージを送り励ましあった。退院して島に戻った人たちにも温かい声をかけあい勇気づけた。私たちの社会が差別や分断、非難やクレームを言い合う社会に向かうのか、それとも互いを気づかい合い、優しさや善意が循環する、相互に助け合う社会に向かうのか、Y字路に立っているのではないかと思う。なぜ与論島では差別や分断よりも優しさや慈悲の力が互いの心を循環



悠々と飛び回るカモメ。2015年10月、京都府伊根町

(稲葉俊郎さん撮影)

症に限らず、いろいろな災害は今後も起きうる。普段の備えさえあれば、わたしたちは必ず困難を乗り越えていける。それこそが人類の歴史だ。わたしたちがどつこう場をつくっていくのか、それこそが今切迫した課題だろう。

19世紀末に流行したペストも、10年くらいかかって落ち着いた。これから10年くらいの遠い視野を持ちながら社会基盤自体の見直し作業に入る必要がある。遠い先を見ながら一歩一歩踏み出せば、困難は乗り越えることができる。人間は文明という高い山をつくり上げてきたが、それは同時に巨大な穴をつくり出している。わたしたちは今、その穴に落ち込んで困っている。今からは穴を埋める修復作業こそが、次の時代に取り組むべき創造的な課題になる。

そもそも、個と場(共同体)との関係性は、人類という種のテーマでもある。同じ霊長類でも、ゴリラは家族というコミュニティを大切にすることが、チンパンジーは家族を解体し、ボスサルが支配する強いヒエラルキー社会で群れをつくる。そもそも、個人と集団の利害は対立するから、個人が幸せに生きること、集団全体が幸せに生きること、利害が衝突しやすい矛盾を同居させ両立させるバランス感覚こそが、人類という種のテーマでもある。個の幸福と集団の幸福、極小と極大の世界を重層的に両立させて生きるために、人間は「対話」という素晴らしい能力を与えられている。対話により困難を乗り越えていく力が生まれる。ウィルスのサイズはかなり小さく、0.1μm(0.0000001μ)しかない。ウィルスに10を7回掛け算すると1μmだが、そのサイズ感人間から見れば地球とほぼ同じサイズである。つまり、ウィルスが人間に感染した現象を考えると、人間が地球に感染した現象を考えると、人間が地球に感染した現象を考えると、人間がウィルスの意味や本質を知ること、人間が地球を真剣に考えることは関係があると感じられるのではないだろうか。実際、自然環境の過剰破壊により、生き物の居場所が奪われたことが、感染症の流行と無縁ではない。現在の問題は個人だけでは解決しえず、人と人が集まった場の新しいあり方を考えることこそが、今求められているとも言えるのだ。



◇いなば・としろう 1979年 熊本市生まれ、医師、東京大医学部付属病院循環器内科助教を経て、4月から軽井沢病院総合診療科医長、著書に「いのちはのちのいのちへ」など。